

〔報告〕 第40回歴史地震研究会参加記

東北大学文学部人文社会学科* 中川 喜弘

Impression Report of 40th General Meeting in Odawara city, Kanagawa

Yoshihiro Nakagawa

27-1, Kawauchi, Aoba-ku, Sendai city,
Miyagi, 980-0862 Japan

§ 1. はじめに

令和5(2023)年9月1日(金)から3日(日)にかけて、第40回歴史地震研究会が開催された。令和5年は大正12(1923)年に発生した関東地震からちょうど100年に当たる節目の年であり、これを記念して研究会は甚大な被害を受けた小田原市で開催された。

会場は小田原三の丸ホールの小ホールで、初日は平日だったにも関わらず多くの人に参加した。研究発表会では口頭発表29件、ポスター発表15件と盛会をみた。本稿では、小田原大会における1～3日目の研究発表会・総会・公開講演会の模様を、簡単に報告する。



図1. 会場の三の丸ホールの様子

§ 2. 研究会1日目:研究会・懇親会

研究会初日の9月1日は、関東地震が発生した日である。10時15分から始まった午前の部は、9件の口頭発表の内、前半5件が関東地震とその被害に関する内容であった。地震に因る津波や土砂崩れによる被害に関する報告に始まり、遠隔地からの支援に

関するもの、さらには震災と歴史資料の焼失に関わるものなど、関東大震災を多角的に捉える時間だったと言える。午後の部では近世の地震に関する様々な話題の報告で、個人的には太閤検地を基にした検地帳の記載から津波の到達域と高さを推定する研究が興味深かった。

午前の部と午後の部の間のポスターセッションは、口頭発表会場である小ホールに至るギャラリーを兼ねた廊下でおこなわれた。口頭発表と同様に非常に多角的な視点・手法による研究が並び、他分野の研究者が一堂に会する歴史地震研究会ならではの光景であった。中でも高校生による継続的な調査成果を、地域の企画展への展示したことについての報告は大きな注目を集め、メディアによる取材も受けていた。



図2・3. ポスターセッションの様子と取材の様子

なお、今年度は三代目の歴史地震研究会の会長を担われた都司嘉宣先生に対して功績賞が贈られた。1日目終了後にその表彰式がおこなわれ、松浦律子会長から賞状が手渡された。

懇親会は、小田原城南側の報徳会館にて開催さ

* 〒980-0862 宮城県仙台市青葉区川内 27-1
電子メール:nakagawa.yoshihiro.s8@dc.tohoku.ac.jp

れた。新型コロナウイルスの感染拡大を受けて昨年まで懇親会を中止していたため、久々の開催に会場は盛り上がりを見せた。



図 4. 懇親会の様子

§ 3. 研究会 2 日目: 研究会・総会

2 日目は、9 時半から口頭発表が開始された。午前の部は大正の関東地震より前に発生した関東地震に関する話題が中心であった。開催地の小田原や箱根の話題もあり、特に小田原城に関する報告が 2 件あったのは、小田原城の三の丸で開催された研究会にふさわしいもののように感じられた。昼休みとポスターセッションを挟んで、午後の部は時代も地域も様々な地震や津波の話題について、発表がおこなわれた。

2 日目終了後には総会がおこなわれ、松浦会長から決算時期を 7 月に移したことや、総会に出席できない場合に委任状をできるようにしたこと、休会制度を新設したこと、幹事の負担軽減策など、活動の報告があった。事業報告と決算報告、監査報告の後、新会長の選出と副会長・幹事以下の指名がおこなわれた。新会長には東京大学地震研究所所長の佐竹健治氏が就任し、副会長に蝦名裕一氏が就いた。その後今後の事業計画・予算案報告などがおこなわれ、来年の 41 回大会の案内もおこなわれた。

§ 4. 研究会 3 日目: 巡検・公開講演会

最終日となる 9 月 3 日は巡検と公開講演会がおこなわれた。巡検は 100 年前の関東地震で被災地となった鎌倉で開催された。鎌倉郵便局前で集合した後、浪川幹夫氏、萬年一剛氏の案内で、鎌倉市材木座地区の津波痕跡を辿りにいった。バスを光明寺へ止め、元禄と大正、二つの関東地震で発生した津波の位置を推定する指標となっている惣門を見学した。

惣門は寛永年間に再興されたと伝わるが、元禄 16 (1703) 年の元禄地震の際、現在位置より 50m ほど内陸にあって現存しているため、元禄関東地震の津波はかつての惣門の位置が浸水域の端と考えられている。また 50m ほど引き出された惣門の直前で大正の関東地震の津波が止まったことから、この惣門からは 2 つの津波の浸水域の差を窺うことができる。



図 5. 現存する光明寺惣門を見学する一同

次に豆腐川での大正関東地震津波の遡上範囲を歩いて確かめた。まず中世鎌倉の湊跡である和賀江島を訪れて海からの距離を確かめた。材木座の津波浸水域は記録や当時の経験者の話から範囲が推定されているが、二班に分かれて暗渠となっている豆腐川を辿った。補陀洛寺の門は地震で倒壊したが津波を被らなかったため、その範囲や地形を観察した。また正田家別邸前を越えて紅ヶ谷へ入った津波の遡上高を確かめるなどした。



図 6. 補陀洛寺近くの豆腐川(暗渠)の上を歩く

続いて、バスで鶴岡八幡宮へ移動し、大正の関東

地震で倒壊した白旗神社石鳥居の笠木や、それがあつた白旗神社、同じく倒壊した鶴岡八幡宮の二の鳥居の部材が転用されている源実朝歌碑などを見学した。

最後に鎌倉国宝館の特別展「大正関東地震発生100年・元禄関東地震320年 二つの関東大震災と鎌倉の文化遺産」を見学した。鎌倉国宝館は鎌倉の社寺に残る文化財が対象の関東地震において大きな被害を受けたことを契機として、文化財の保護・展示を目的として昭和3(1928)年に開館したものである。地震後、被災した文化財の修復のために境内に修理所が設置されたが、のちに鎌倉国宝館内にも設けられ、ここでは鶴岡八幡宮のみならず県内外の多くの社寺の宝物類の修復を担った。今回の特別展では、こうした文化遺産の復興事業に光を当てる展示となっていた。

各自小田原へ戻った後、14時から公開講演会が実施された。講演会は「関東地震100年：日本史上最悪の地震災害の実態と最新研究」と題して、武村雅之氏の「関東大震災の真実を求めて：帝都復興事業と現在の東京」、吉田律人氏の「横浜市民の関東大震災一被災者の体験記を中心に」、宍倉正展氏の「くり返す関東地震：過去6千年の歴史」の3講演からなり、多くの一般参加者も見られた。



図7. 公開講演をする武村雅之氏

講演はそれぞれ専門の中から関東大震災を総合的に捉える内容だった。武村氏は長年にわたって蓄積されて来た震度データや被害状況から東京という町の構造的な弱点を解説した後、それを克服しようとした帝都復興事業の先進性と近年の再開発との違いについて力説された。吉田律人氏は横浜の被災状況について、当時小学生だった葛城久子の体験

記に、現場となった地点の古写真なども交えて、臨場感たっぷりに描き出された。宍倉正展氏は過去の関東地震の痕跡について紹介され、その周期とそこから計算される今後の発生確率の考え方について論じられた。いずれも100年前の関東地震を皮切りとした講演で、市民からの質問も上がっていた。

§5. おわりに

令和4(2022)年10月に入会した筆者にとって、本大会は会そのものにも初参加だったが、初めて発表する機会も頂き、ポスター形式にて報告をおこなった。しかも内容が関東大震災に関するものであったため、多くの方にご覧頂いた。地震学の第一線で活躍されている方だけでなく、長く地域に根差して活動をされてきた方まで、多彩な視点から、多様なご意見を頂戴することが出来たことは、非常に貴重な経験となった。

歴史地震研究会は文理の垣根を超え、それ以上に様々な分野の研究者が一堂に会するという点で特徴的な研究会であるように感じる。そこから学び取る事の出来ることは実に多種多様で、その刺激は互いの研究を進めることにも大いに繋がると思う。今回得た経験を、これから先の学部生活、そして今後の研究にも大いに役立てていきたいと、身に刻んでいこうである。

最後になりますが、会の運営と大会の進行にご尽力頂いている事務局や関係者の皆様、殊に行事委員の皆様には、厚く御礼申し上げます。来年以降の会の成功と発展を祈念し、ここに記します。